

寛文二年小立野へ移轉再興被仰付と書載せられた、此は再建落成の年曆なるべし。

○如來寺塔頭址

十二冊定書に云ふ。如來寺塔頭信入院攝取院、如來寺開山取立之寺にて、最前天徳院殿より權現様御位牌御立被成候時分御再興、寛文元年小立野へ御移被成。とあり。されば元和四年に如來寺卯辰山に造營被命頃、兩塔頭も再建を命ぜられしと也。

○如來寺塔頭祖閑傳話

三壺記に云ふ。玉泉院殿御歳五十歳にて、元和九年の三月廿四日に御遠行あり。其の節老中より獅子之助と云ふ御相撲の者を寶圓寺へ遣し、玉泉院様御遠行の案内として被遣、早々登城有べきよし申達しければ、獅子之助其躰すさまじき大男にて大なで付故、荒五郎とも云ひたき男、長き刀を指し、寶圓寺に早々と勸むれば、和尚此の体を急度見て、夜中にはあり、是はまさしく盜賊の我をいさなひ、何方にてか打殺し、衣をはぎとらんとの謀なるべし。卒爾に罷出てはあしかりなんと心得て、和尚被申は、玉泉院殿御

遠行ならば、老中か御一門方よりか、書札にてしかと御使者等の有るべきに、和どのが躰は、先年利長公の高岡に御在城の時、歌舞伎者共數十人とらへて張付に被仰付夢のそろえもん三昧骨右衛門など、かやう成る有様の者ならん。何者ぞ名を名のれと被申ければ、獅子之助興さめて立歸り、其の由申上ければ、和尚申す所も尤とて、御使番を被遣云々。扱玉泉院様御遠行之時寶圓寺和尚、獅子之助に逢ひて夜盜と思はれるに、利常卿の和尚も申す所理ありと御意被成事は、其の春正月の初に、淺野川の山の根に如來寺あり。一藁に祖閑と云ふ坊主あり。塔頭に小寺を作り、其の奇置なる事都の古跡にひとし。圍爐裏の縁など梨子地蒔繪にして、諸人出入致し慰みけり。しかも手前有徳人にて有りけりと沙汰しけり。然處夜中亡者を送り度由申來る。祖閑袈裟衣を着飾り、同宿一人草履取連れて、馬谷の奥なる三昧へ参りければ、同宿小者を追拂ひ、祖閑を切殺し、袈裟衣を削ぎ取りて死骸を置けるを、其のあかつきに寺より尋ね見付たり。故に其の頃出家方には、夜中にむざと導師に出づる事を吟味して、慥ならねば出でざりけり。

されば寶圓寺の雲堯和尚も、強力にて早馬乗の上手也。辨慶をも欺く程の和尚なれども、聞おぢせられし可笑しさよと諸人申あへりけり。扱彼の如來寺塔頭の祖閑を殺したる者は、後々に聞えけり。黒田頼母と云ふ御小姓の番頭あり。其の家禮に林藤左衛門と云ふ者の女あり。淨土宗にて祖閑旦那なり。常々參詣して祖閑と密通す。男聞きて、祖閑をたばかり出し、則ち女もたばかり連れ出し、一つ所にて打殺し、加州を立退きけりと後に聞えけりとぞ。とあり。今按ずるに、右塔頭は、信入院か攝取院なるか未だ詳かならず。

○普香山蓮昌寺

法華宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開基、天正十年備日禪建立。寺屋敷は日禪之弟子日新之代、慶長十八年從壽福院殿微妙公へ被仰進、淺野川關助馬場近所にて拜領罷在候處、藩之御用地に而被召上、替地卯辰油木山に而拜領被仰付、寺建立仕處、萬治元年に焼失仕、其後如來寺跡屋敷を奉願、拜領被仰付、于今罷在候。從壽福院殿御寄進物色々有之候處、萬治元年三月廿六日火災之節不殘焼失

仕、且從壽福院殿當寺中興三世日達与申僧へ御祈禱被仰付、毎年御札卷數等献上仕に付、壽福院殿御意之趣女中奉書之文敷通所持仕。とあり。按ずるに、油木山月心寺由來書に、明暦元年屋敷替致し、本如來寺町之内に寺造立致し、其後日蓮宗蓮昌寺上ヶ地へ移轉仕。とあり。されば蓮昌寺は、油木山より如來寺跡屋敷へ移轉し、月心寺は元如來寺より、油木山の蓮昌寺跡屋敷へ移轉せしもの也。兩寺共移轉は萬治年中の事ならんか。

○對馬山宗龍寺

曹洞宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開基、慶長十七年明庵長老創立致し度旨に而、金澤鹽屋町に於而寺地七百歩拜領致し造立。其頃不破源六先祖被取立、親之法名を以宗江寺と稱す。元和九年天徳院殿御逝去之節、明庵長老御剃髮之儀式、尊骸之御番被仰付、則尊骸之廻りに被立置候屏風一雙御机一脚拜領被仰付、當寺校割に相成、于今有之。萬治三年寺地御用地に相成被召上、爲替地小立野にて八百歩拜領被仰付。其節岡嶋市郎兵衛一類、御老中まで被申上寺取立、則岡嶋先祖之法名を以宗龍寺と改號仕、